佐 野 遺 跡 発 掘 調 査 概 報

1990 . 12

㈶和歌山県文化財センター

序

佐野遺跡は和歌山県の北部、伊都郡かつらぎ町に所在する弥生時代から古墳時代にかけての集落跡であるとともに、白鳳時代の寺院として著名な佐野廃寺の跡でもあります。

遺跡については昭和50年以来、数次にわたる発掘調査が実施され、集落の変遷や寺院の規模などが明らかにされつつあり、紀ノ川中流域の代表的な遺跡であることが判明いたしました。

このたび、遺跡内で宅地開発がなされることとなり、この工事に先だって、当センターが発掘調査を実施いたしました。

本書は、その成果をまとめた概要報告書でありますが、当地方の歴史をしる上での一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたり種々御協力をいただいた関係各位並びに地元の皆様に深く感謝の意を表し、併せて厚くお礼を申しあげます。

平成２年12月

財団法人　和歌山県文化財センター
理事長　**仮　谷　志　良**

例　　言

1．本書はかつらぎ町佐野地内における宅地開発に伴う佐野遺跡発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は、財団法人和歌山県文化財センターが南海不動建設およびトーヨー建設から委託を受け、平成２年７月から同年11月にかけて実施した。調査面積は、南海不動建設分944㎡トーヨー建設分286㎡、合計1230㎡である。

3．両者はそれぞれ別個の事業であったが、調査区が隣接し調査期間も平行するなど密接不可分の関係にあるため報告にあたっては合冊とし、これに係る費用については調査面積などをもとに両者で按分した。なお、本文中のⅠ・Ⅱ区が南海不動建設、Ⅲ区がトーヨー建設に係るものである。

4．調査にあたっては、上記２社、和歌山県教育委員会文化財課、かつらぎ町教育委員会、並びに地元の方々の御配慮、御協力をいただいた。

5．遺物はすべて通し番号で表示し、本文中の図・図版の遺物番号は共通する。実測図の縮尺についてはすべて1/4で統一した。ただし写真については任意の大きさである。

6．発掘調査はⅠ・Ⅱ区を文化財センター技師・村田弘が、Ⅲ区を同・佐伯和也が担当し、本書の執筆・編集については両者が協議の上これにあたった。

目　　次

序
例　言・目　次
Ⅰ　位置と環境……1
Ⅱ　遺跡の概要……2
Ⅲ　調　査……4
　a　遺　構……4
　b　遺　物……11
Ⅳ　ま　と　め……13

図1　佐野遺跡とその周辺……1
図2　狭屋寺説話絵図……2
図3　既住調査区位置図……3
図4　調査区と佐野廃寺……4
図5　Ⅱ・Ⅲ区平面図……6
図6　ＳＢ－06実測図……8
図7　ＳＢ－07・08・21実測図……10
図8　遺物実測図……12
図9　主要遺構配置図……14

写真1　土器出土状況……5
写真2　ＳＢ－07炉部分……9
図版1　遺構写真……16
図版2　〃　……17
図版3　〃　……18
図版4　〃　……19
図版5　〃　……20
図版6　遺物写真……21

財団法人和歌山県文化財センター
年　月　日

Ⅰ　位置と環境

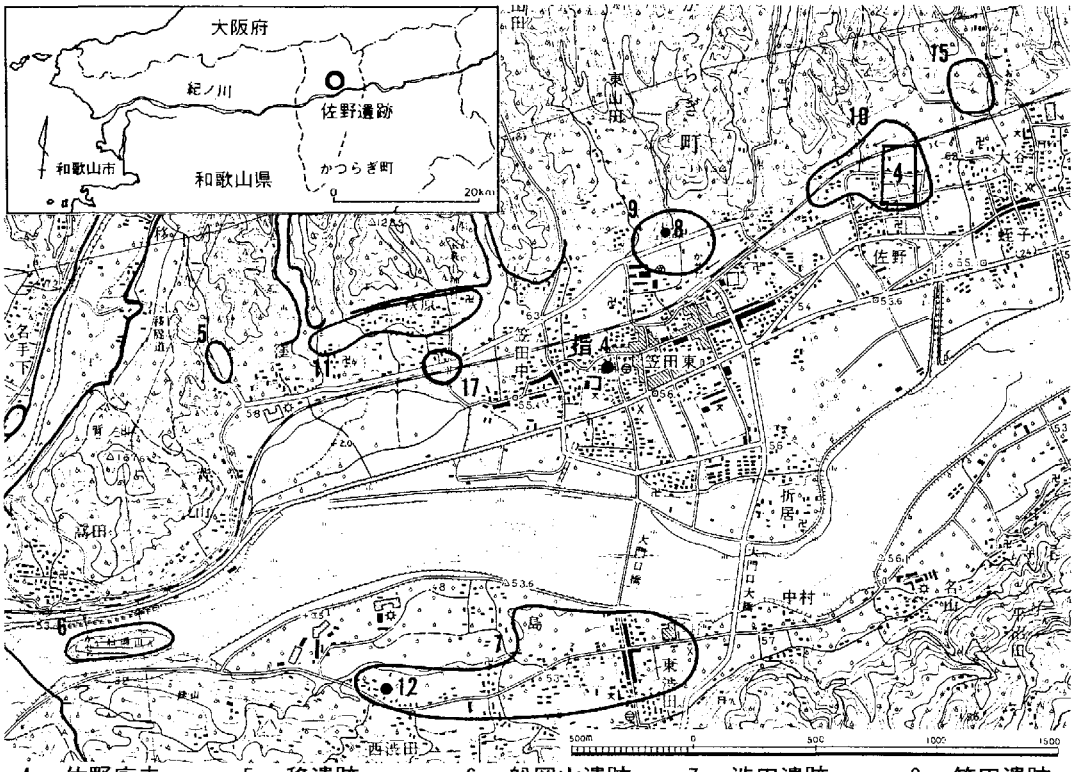
佐野遺跡は和歌山県の北部、紀ノ川中流域の伊都郡かつらぎ町に所在している。かつらぎ町は紀ノ川によって南北に二分されているが、遺跡が所在するのはその北岸、佐野と呼ばれている地域である。

このあたりは和泉山脈から南流する小河川によって形成された複合扇状地であり、その南端を紀ノ川の氾濫によって削られているため標高60m前後の台地状の地形となっている。南側の沖積平野とはおよそ10mほどの比高差があり、氾濫による影響を受けにくい地域であった。

このように当地一帯は南に開けた眺望の地であるとともに、弥生時代の人々にとっては、近くを流れる紀ノ川での漁撈や小河川を利用しての稲作など生活を営むのに好適地であったと考えられ、早くから集落が開ける環境にあったものと言えよう。

また、古代になると遺跡の南側を大和と四国を結ぶ重要な交通路であった南海道が通るなど交通の要所の地でもあった。

周辺の主な遺跡としては、縄文時代後期から晩期にかけての渋田遺跡、弥生時代後期を主とする船岡山遺跡などが知られている。



4　佐野廃寺　5　移遺跡　6　船岡山遺跡　7　渋田遺跡　8　笠田遺跡
9　笠田Ⅰ遺跡　10　佐野遺跡　11　萩原遺跡　12　西渋田１号墳

図１　佐野遺跡とその周辺

II　遺跡の概要

佐野遺跡については、昭和50年以来これまで10数次にわたる発掘調査が実施され遺跡の内容が徐々に明かになってきている。

それによると佐野遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡であるとともに奈良時代に建立された寺院の跡でもあるという、少なくとも２時期にわたる複合遺跡であることが判明してきた。

集落の遺構としては、これまでの調査で20棟の竪穴式住居が確認されている。このうち円形住居は14棟、方形住居は６棟を数えるが、時期による偏りや変遷についてはこれまでの調査で見る限り判然としない状況である。しかし、全体としてみるとこれらの住居跡は遺跡内の中央からやや東よりの地域に集中する傾向が窺えるものと言えよう。

また、この集落を囲んでいたと思われる幅約７ｍ、深さ0.6ｍ以上を測る大きな溝(環壕)の一部も昭和56年度の調査で検出されている。

これらの調査成果や周囲の地形から集落の範囲は東西400ｍ、南北300ｍに及ぶものと推定されている。

出土する遺物からみて、集落は、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけて営まれていたものと考えられ、その規模や出土する遺物の量などから紀ノ川中流域、伊都郡域の中心的な集落であったものと思われる。

図２　狭屋寺説話絵図(紀伊名所図絵)

一方、奈良時代のはじめこの地に建立された寺院(佐野廃寺)は『日本霊異記』にみられる「伊刀の郡桑原の狭屋寺……」の狭屋寺がこれに当たるものと考えられている。

これまでの調査の結果、佐野廃寺(＝狭屋寺)は東西約270尺(81ｍ)、南北約540尺(162ｍ)の寺域をもち、南門を入って左手に金堂、右手に塔、その両者の背後に金堂が建つという、いわゆる『法起寺式』の伽藍配置を持つ寺院であることがわかってきた。

しかし、これらの主要伽藍に伴う僧房や食堂、倉、雑舎等といった日常生活に関わる建物の配置、あるいは回廊の有無など不明な点も数多い。

なお、出土した瓦などからその創建は７世紀

の後半(670年前後)で、奈良の川原寺との関係が深い寺であったと考えられている。

そのほか遺跡内では小量ながら中世の遺構・遺物も検出されており佐野廃寺が廃絶した後もこの地において人々の生活が続けられていたようである。

以上のように、佐野遺跡は古墳時代中期から奈良時代前期までの空白期間はあるものの原始・古代から中世に至るまで伊都郡の中枢的な機能を保ちつづけた貴重な遺跡であるといえよう。

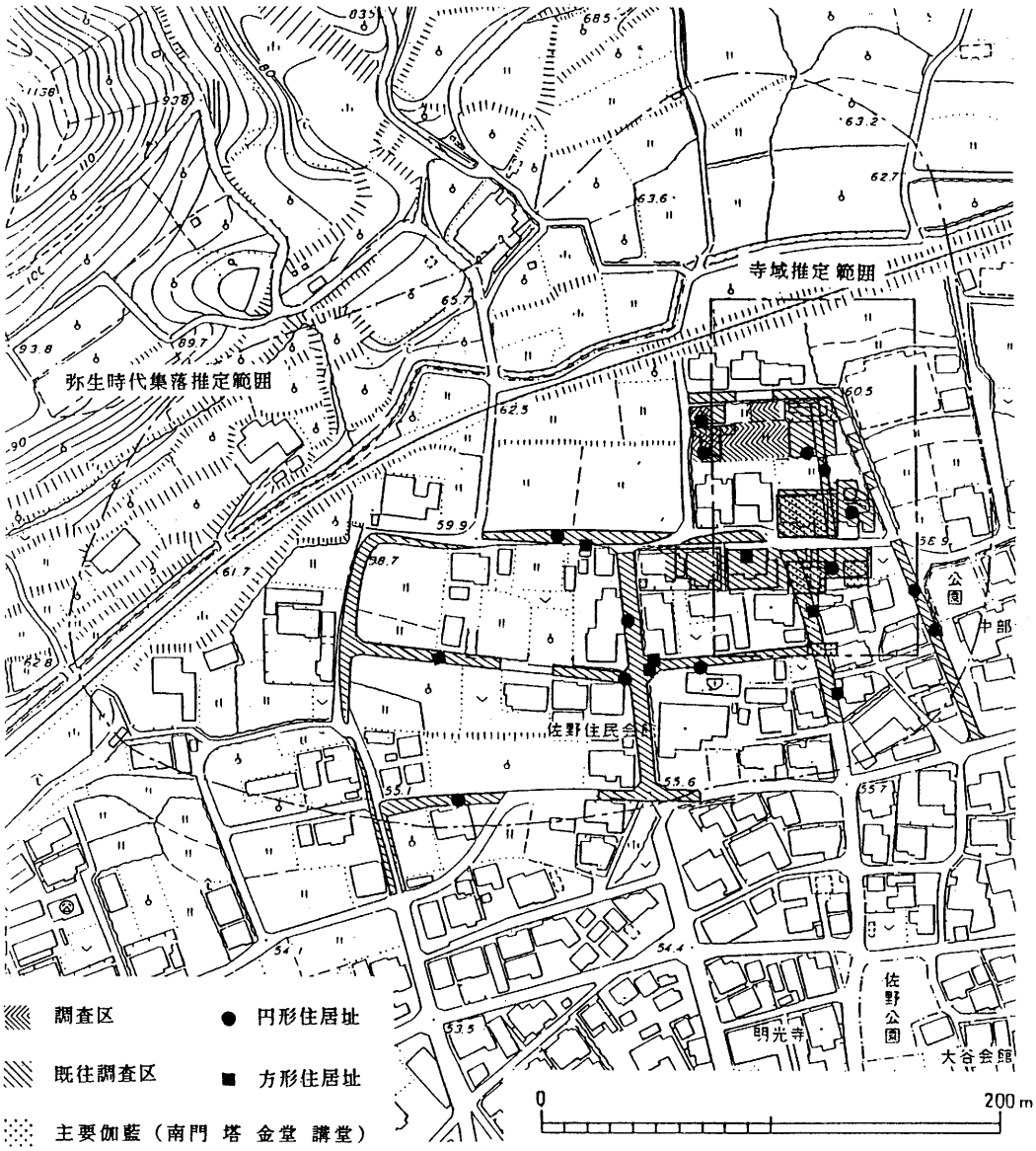


図3　既住調査区位置図

Ⅲ 調　査

調査区は、図４にも図示したように寺域の北半部で、講堂の中心部から北西方向45m付近に相当するところである。この付近は寺に付属する僧侶たちの日常生活の場であり、僧房、食堂、厨などの生活に関係する建物が建てられていたと想定される地域にあたる。

今回の調査区の隣接地は、すでに昭和53年に発掘調査が実施されており、その折の調査では奈良時代の掘立建物や寺域の西側を区画すると考えられる２条の溝、土坑などが検出されている。また、今回の調査で完堀した弥生時代の竪穴式住居についてもその存在が確認されていた。

今回の調査では、その折の掘立建物の延長部分や、新たな掘立建物、土坑、古墳時代の竪穴式住居などが検出された。

出土遺物には、弥生時代後期の壺・甕・高坏、奈良時代の須恵器の坏、土師器の皿、中世の瓦器碗などがあるが、全体に遺物の量は少ない状況であり大部分が細片であった。

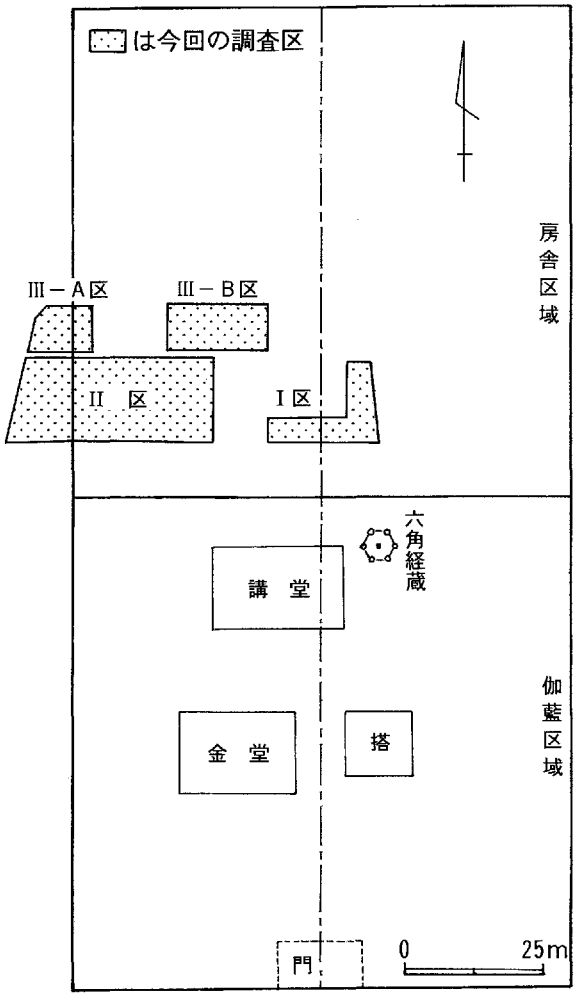


図４　調査区と佐野廃寺

a 遺　構

調査区の現況は水田であり、この耕作土の下には包含層の堆積が認められたが、調査区の北側では厚さ10cm、南側の深いところでは厚さ30cmと南に下がるにつれて厚くなっていた。

遺構はすべてこの包含層を除去した面で検出したものである。

以下、奈良時代のものと弥生・古墳時代のものとに大別し、主要なもののみその概略を記すことにしたい。

《奈良時代の遺構》

奈良時代の遺構としては、土坑、掘立柱の建物などがある。

土　坑（SK－01）　Ⅲ－A区の東側で検出した３m×２mほどの不整形な土坑である。深さは約30cmで小礫混じりの土により埋まっていた。この周辺ではこのような不整形な土坑がかたまって検出されているが、いずれもその性格については不明である。

土　坑（SK－02）　II区中央の南端で検出したもので、東西４ｍ、南北６ｍを測り、南北両辺の中央部が円形に突出している。深さは50cmほどで壁面はほぼ垂直に掘られていた。

このような形状からなんらかの施設として意識的につくられたものであることが想像されるが、その性格については不明である。なお、この土坑の埋土からは８世紀前半代の土師器の皿、須恵器の坏片が出土している。また、後述する建物－01・02はこの土坑が埋められて後、この上に建てられたものである。

建 物－１　桁行５間以上、梁行３間の規模をもつ南北棟の建物である。柱間は桁方向が2.8m、梁方向が2.1mの等間となっている。柱の掘り形は平均75cmほどで、深さは約60cmである。掘り形内の埋土は黒味を帯びた褐色土で、遺物は少量だが土師器の皿片が出土している。

建 物－２　桁行４間以上、梁行２間の規模をもつ南北棟の建物である。柱間は桁方行が2.8m、梁方向が2.4mの等間となっている。柱の掘り形は平均80cmほどで、深さは約50cmを測る。前述したようにSK－02との切り合い関係から８世紀前半以降の建物であることがわかっているが決め手となるような出土遺物がなく、時期については判然としない。

建 物－３　Ｉ区とII区にまたがって検出した建物で、桁行５間、梁行２間の東西棟である。柱間は桁方向が2.6m、梁方向が2.1mを測るが、北側に30cmほどのやや小振りの掘り形が並ぶことから北側に廂のつく建物ではなかったかと想像している。建物本体の柱の掘り形は、平均85cmと大きく、深さはＩ区側では60cmを測るが、南側のII区の部分は後世にかなり削られたもようで20cmほどしか残っていない状況であった。

なお、これらの掘り形は最低３つの切り合いが確認されており、新しいものほど掘り形の規模が小さくなっている。このことから同一場所で頻繁に建てかえが行われており、そのつど建物自体は貧弱なものとなっていった様子が窺われる。

建 物－４　53年度の調査で検出されていた東西に長い建物であるが、今回新たに検出した２間分を加えることによって桁行７間の規模をもつ建物であることが判明した。

写真１　土器出土状況（左・弥生土器　右・須恵器）

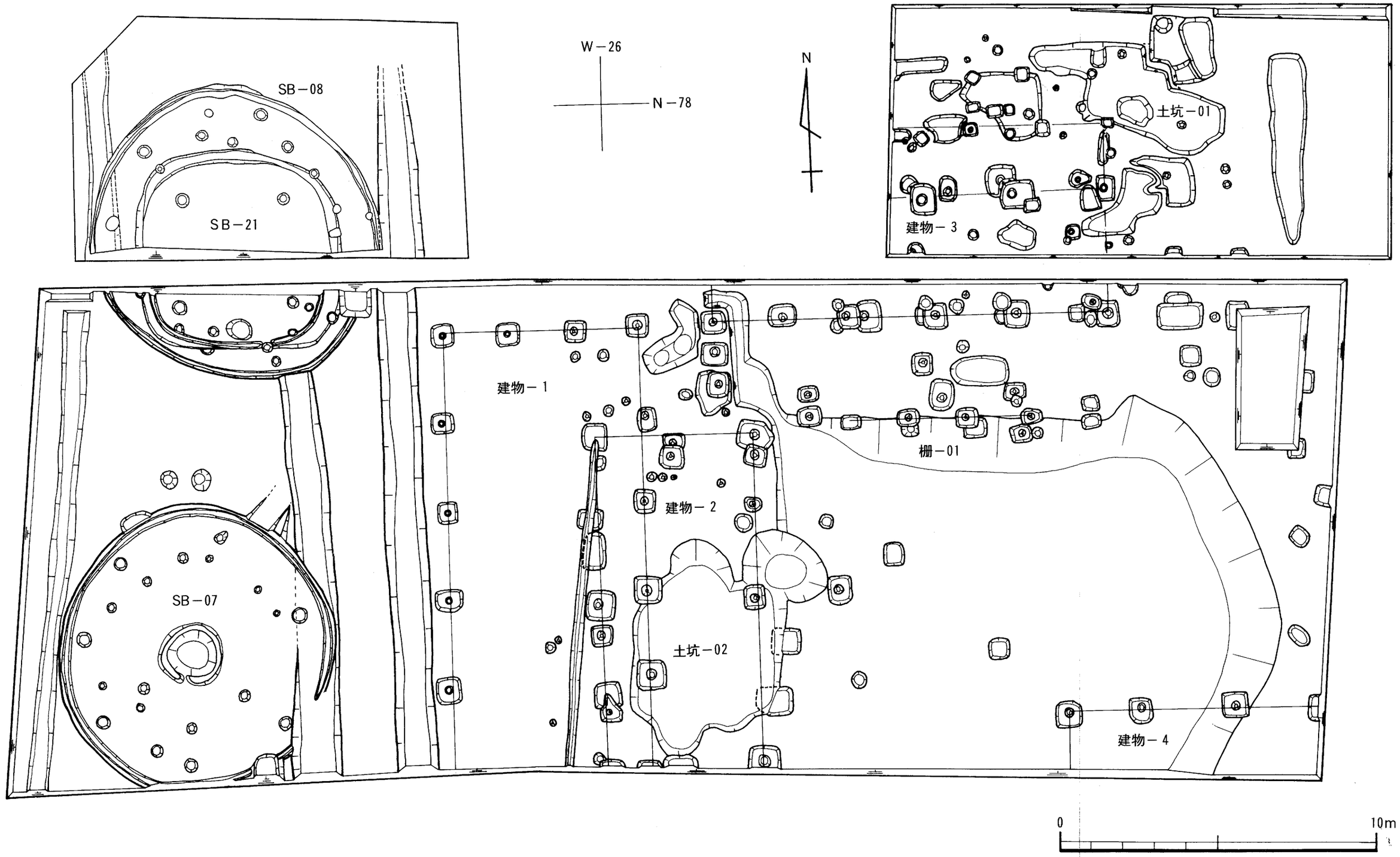


図5　II・III区 平面図

掘り形は約80cmを測るが、深さはかなり削られているもようで20cmほどしか残っていなかった。

柵－01　建物－03南側で検出した遺構で、延長約７ｍを測る。掘り形は40cmほどで、1.9m間隔で４間分を確認した。これらの掘り形に対応するものが検出できなかったことから柵と考えた。しかし、建物－03の軸線とは方向をやや異にしている点や南側が削られていることを考慮すれば建物の一部である可能性も充分に考えられるところである。

以上述べた遺構は、前後関係はあるものの出土遺物などからいずれも８世紀代、奈良時代のものと考えて大過なく、当然ながら佐野廃寺に帰属するものと思われる。

なお、遺構は確認できなかったが同時代のものと考えられるフイゴの羽口や鉄滓がⅢ－Ａ区の西側で何点か出土しており、付近に鍛治施設のあったことが推定される。

《弥生・古墳時代の遺構》

この時代の遺構には４棟の竪穴式住居がある。このうち弥生時代の３棟については先述したように昭和53年度の調査ですでに確認されていたものであるが、今回の調査で完掘し、詳細な資料を得ることができたものである。

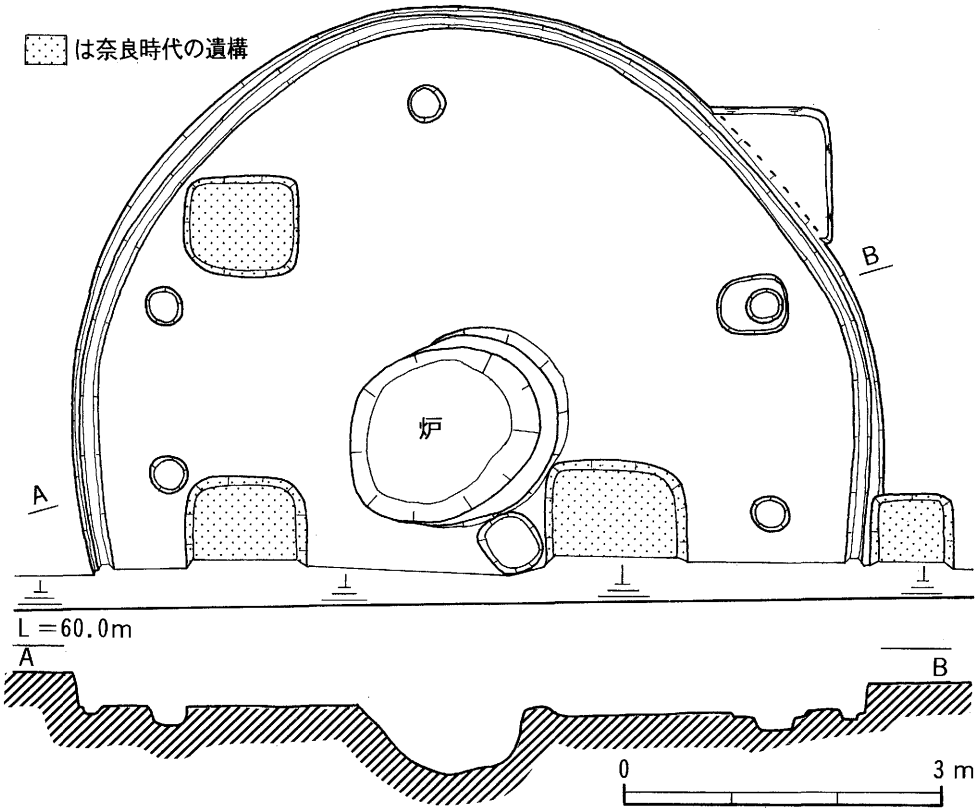


図６　ＳＢ－06　実測図

SB－06　直径約６ｍを測る円形の竪穴住居である。壁高は20cmほど残っていたが、床面は奈良時代の佐野廃寺関係の遺構により撹乱を受けてしまっており、その遺存状況はきわめて悪い状況であった。炉はほぼ中央部に設けられており、直径１ｍ、深さ50cmほどを測る。炉の周囲には幅15cm、高さ５cmほどの炉堤が巡らされている。また、その外側には炉から掻き出したと思われる焼けた土が薄く堆積していた。埋土は小礫を含む茶褐色土で、この中より少量だが弥生時代後期の高杯、甕、壺が出土している。

SB－07　直径９ｍを測る円形の竪穴住居である。壁高は約40cmと残りは良く、その内側に沿って幅約20cm、深さ５cmほどの壁構が巡っている。柱穴はいずれも直径25cm前後で、同心円状に７本が配されていた。

中心部に掘られた炉は直径1.5m、深さ60cmと大きなもので、その周囲には幅20cm、高さ６cmほどの炉堤が巡っている。さらにその外側には写真２に示すように直径10cm弱、深さ15cmほどの小さな穴が10個円形に配されていた。この用途については不明だが、おそらく炉の上部に設けられていた棚などの支柱ではなかったかと想像している。

埋土から弥生時代後期の土器片が少量出土しているが、床面および炉内から原位置をたもっての出土は見られなかった。

SB－08　II区とIII区にまたがって検出した直径9.5mを測る大型の円形竪穴住居である。南半部はかなり削られているため残りは悪いが、北半部では壁高は40cmほど残っていた。

周溝は幅約20cm、深さ５cmを測る。柱についてはついて判然としないが、おそらく９本柱になるものと思われる。当初、北半部のみを発掘した段階ではベッド状遺構を伴う住居である可能性が考えられたが、南半部の調査の結果、たまたま隅丸方形の竪穴住居がこの住居跡にすっぽりとおさまるかたちで切りあっていることが判明した。出土遺物からこの住居は弥生時代後期のものと考えられる。

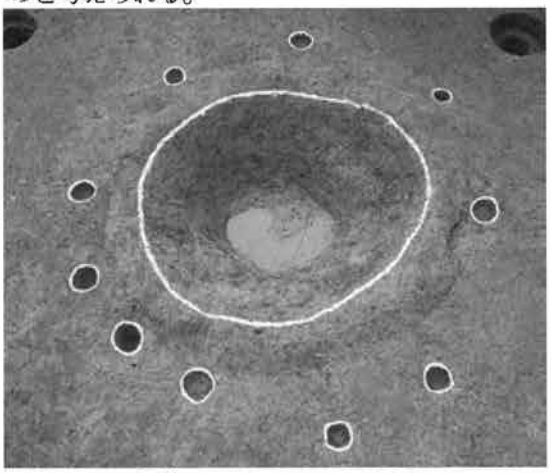


写真２　ＳＢ－07 炉部分

SB－21　前述のSB－08の中で検出した一辺６ｍほどの隅丸方形の竪穴住居である。柱穴は直径約20cm、深さ30cmを測り、４本柱である。周溝は幅15cm、深さ５cmほどで、一部二条巡っているところから作り替えがなされたものと考えられる。時期については出土遺物がほとんどなく不明な点が多いが、おそらく他の住居より新しく、弥生時代後期末から古墳時代初めにかけてのものと思われる。

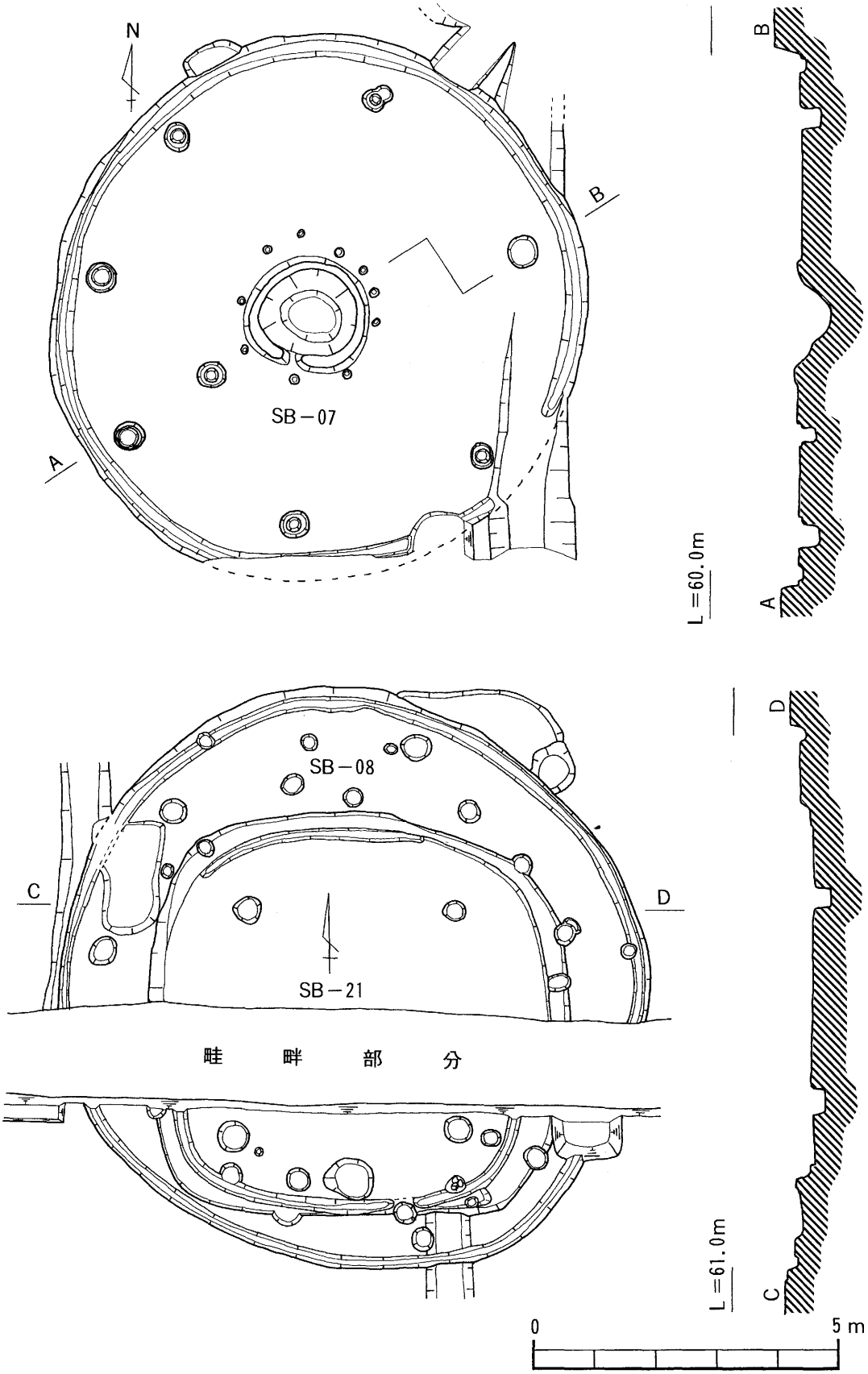
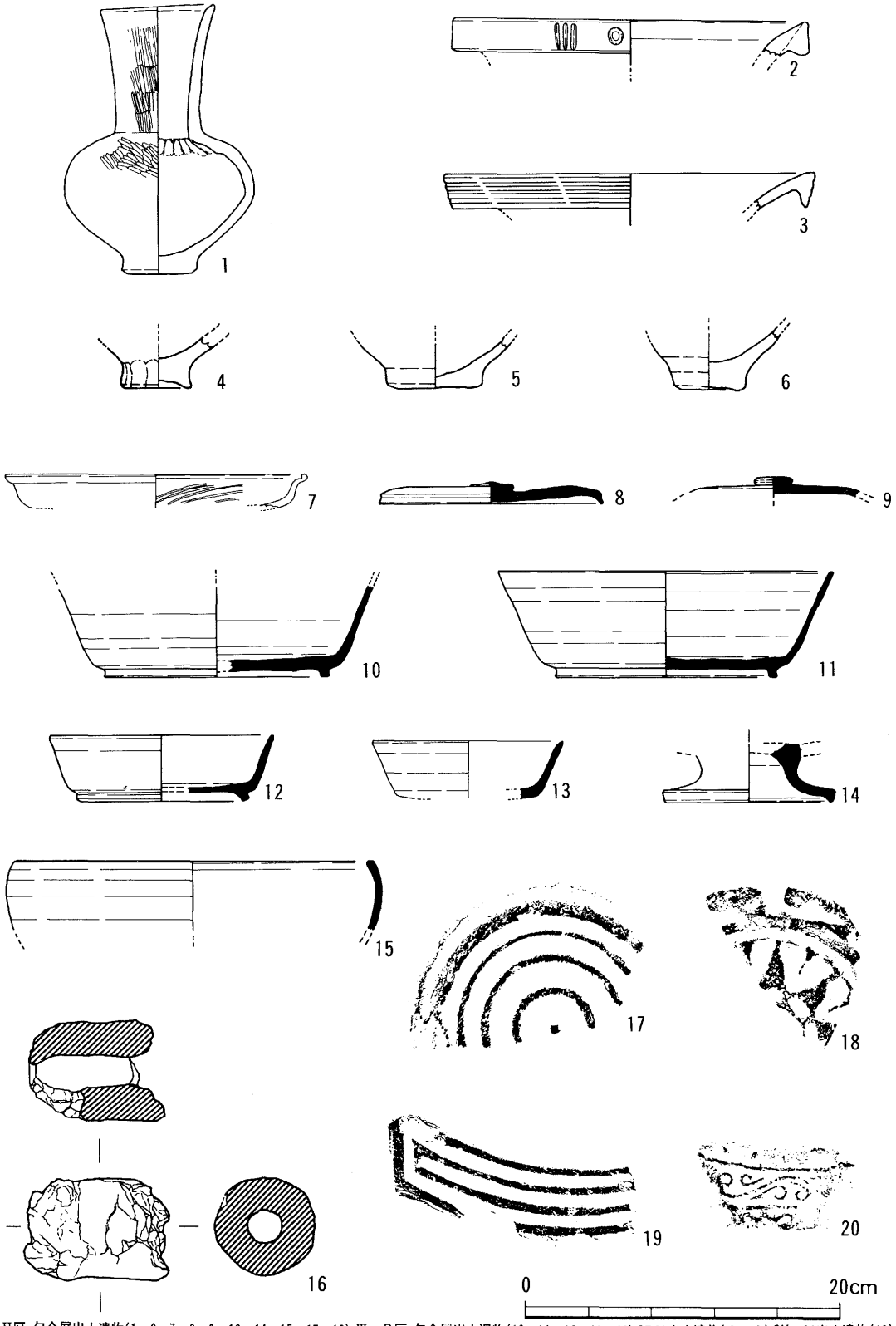


図7　ＳＢ－07・08・21 実測図

b 遺　物

遺物は大別して弥生式土器(1～6)と奈良時代の土器(7～15)、フイゴの羽口(16)、瓦(17～20)に分けられる。この他中世の遺物としては、土師器の羽釜、瓦器碗・皿、中国製の白磁・青磁などが出土している。

(1)は口縁部がゆるやかに外反し、体部は扁平な球形を呈する。底部が突出ぎみの細頸壺である。外面は口縁直下から丁寧な細かいミガキが施されている。一部口縁端部と胴部下半は器面が摩耗している。体部最大径の一部にはタテ2cmヨコ4cm程度の黒斑が認められる。胎土は精良で若干の石英、長石の微粒子を含む。全体に赤褐色を呈する。(2・3)は広口壺の口縁部である。(2)は口縁端面にタテ方向のヘラによる3条の沈線と竹管文で加飾されている。口縁端部は粘土を貼り付けて肥厚させている。粘土はわりあい精良で径1mm前後の片岩、長石を少量含み、色調は全体に茶褐色を呈する。(3)は口縁端面に細い3条の疑凹線が施されている。口縁端部に1条の粘土を貼り足してシャープな垂下部を作り出している。器面全体は摩耗しており、調整は不明である。胎土は精良で全体に黄褐色を呈する。(4～6)は甕の底部である。(4)は指押えが顕著に認められる。底部はやや上底ぎみで、底径は5cmである。全体に灰褐色を呈し、精良である。(5)は器面が磨滅しており、調整は全く不明である。径1～3mm程度の砂粒を多量に含み、赤褐色を呈する。(6)も磨滅しており調整は不明である。(7)は土師器の皿である。内面には放射状の暗文が施されている。口縁端部内面には1条の沈線を巡らしている。ヨコナデによる丁寧な調整がなされている。復元口径は19cmを測る。(8・9)は須恵器の杯蓋である。両方とも扁平な擬宝珠のつまみを持つものである。天井部はほぼ水平で回転ヘラ削り、内面はヨコナデによる調整が施されている。(11～13)は須恵器の杯身である。高台を付すもの(11・12)と付さないもの(13)がある。(10・11)は大ぶりで口径21cmを測る。両方とも「ハ」の字形に開く高台を付し、接地面は外方にある。(12)は口縁部がゆるやかに外反し、高台は端部近くに付され「ハ」の字形に開く。接地面は内方にある。調整は回転ヨコナデにより丁寧に行われている。(13)は灰白色を呈し、軟質である。(14)は高坏の脚部である。断面はサンドイッチ状を呈し、径1～2mmの荒い砂粒を若干含む。(15)は鉄鉢で、内外面は丁寧なヨコナデで仕上げられ、口縁端部は内方向に突がりシャープである。復元口径は約22cmである。(16)はフイゴの羽口である。外径は約6.5cm、内径は約2cmである。色調は全体に柿色を帯び、端部は黒色の釉が付着し、光熱を受けたことが窺える(17・18)は軒丸瓦である。(17)は重圏文軒丸瓦で中心点から4重の同心圏が巡り、さらにその外周に一段低く面を設けて外縁としている。瓦当復元口径は18.5cm、厚さは約3cmである。(18)は蓮華文を三角形を用いて幾何学文のように表現した特徴的な瓦である。(19・20)は軒平瓦である。重廓文軒平瓦(19)は二重圏線を表し、重圏文軒丸瓦とセットになるものである。(20)は偏行唐草文軒平瓦で、上外区には珠文を、下外区には線鋸歯文を配するものである。



II区 包含層出土遺物(1、2、7、8、9、12、14、15、17、18) III－B区 包含層出土遺物(10、11、16、19、20) SB21出土遺物(3～6) SK－01出土遺物(13)

図8　遺物実測図

Ⅳ まとめ

今回の調査の成果としては、新たな掘立建物を検出したこととともに過去の調査で検出されていた建物の延長部分を確認し、その規模を確定できたことがあげられよう。これにより今回の調査区周辺では図－9にも図示したように合わせて10棟の建物が確認されたことになる。

このうち建物－10を除けば、前後関係はあるもののいずれも奈良時代の建物と考えらる。建物－8については総柱であることから倉庫であったと考えられ、建物－4は講堂の裏手15mほどに位置し、東西に7間の規模をもつ大きな建物であることから僧房であった可能性が指摘できよう。その他の建物についてはその性格は明確ではないが、先述したようにこの地域は寺域の北半部にあたることなどから、僧侶たちの日常生活のための建物であったと想定される。

詳しくは今後の調査における佐野廃寺の全体像を捉えていく作業の中で徐々に明らかにされていくものと思われる。

弥生時代の遺構については今回検出した竪穴住居のうちSB－07，08はともに直径9mを越えるもので、一般の住居としてはきわめて大きなものといえる。

その意味では集落における特殊な建物、たとえば、集会所あるいは工作所といった可能性も考えることができるが、規模以外にはそれらを示す具体的な根拠はなく、断定するには充分な状況ではない。この問題についても今後の周辺での調査結果をまって再度検討する必要があるものと思われる。

これで今回の調査分を含めて佐野遺跡内においては合計21棟の竪穴住居が確認されたことになり、その密度からもこの地方における中心的集落であったことが裏付けられたものと言える。

また、集落の全盛期は今回の遺物の傾向からもうかがえるように弥生時代後期にあるものと言えよう。

以上のように、今回の調査で得ることができた資料は新たな発見には乏しいものではあるが、これまでの調査成果をさらに補強するものである。今後はこれらの資料をもとに、周辺の同時代の遺跡との関連、比較といった広い視点からの調査・研究が望まれよう。

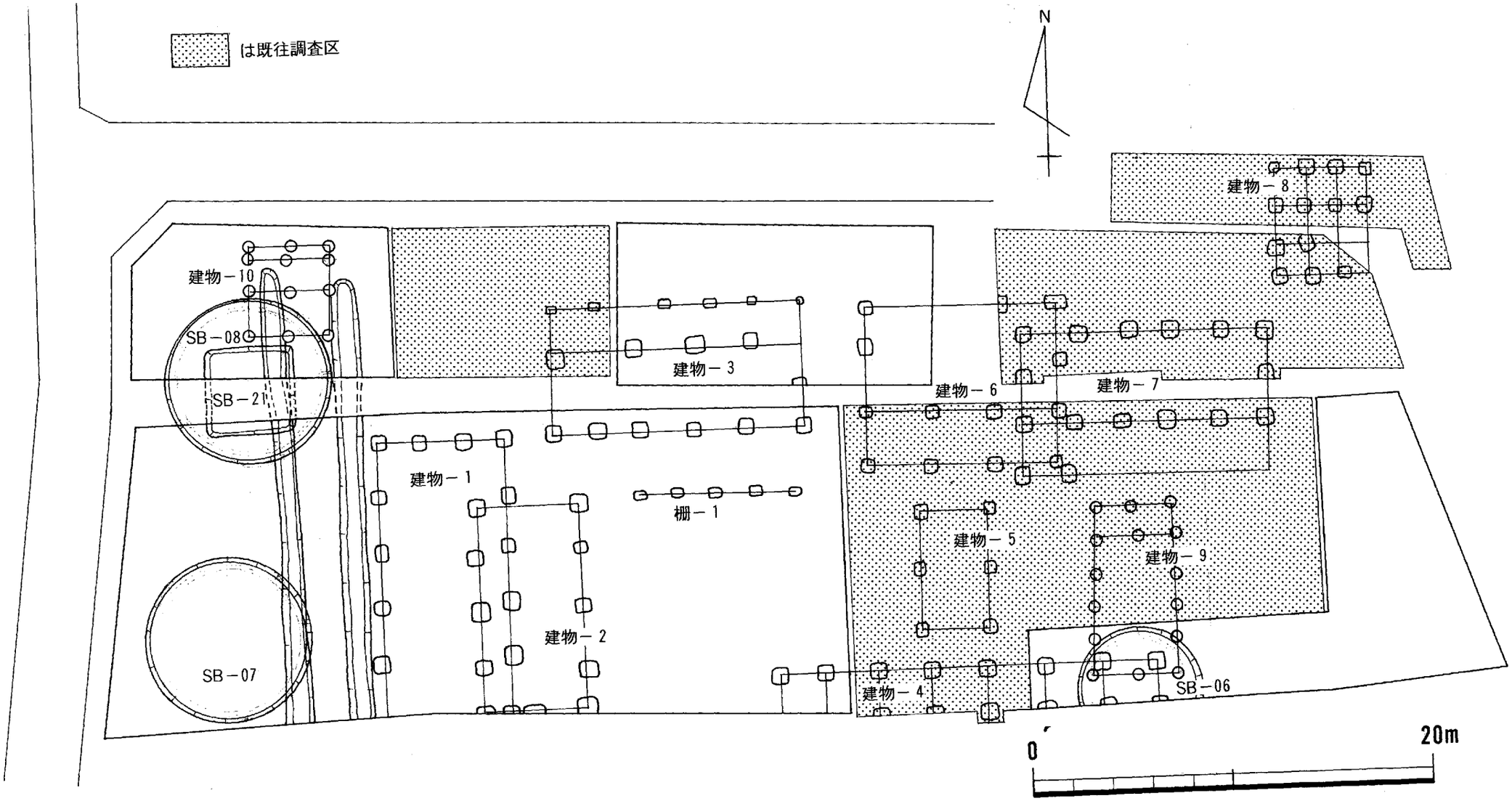
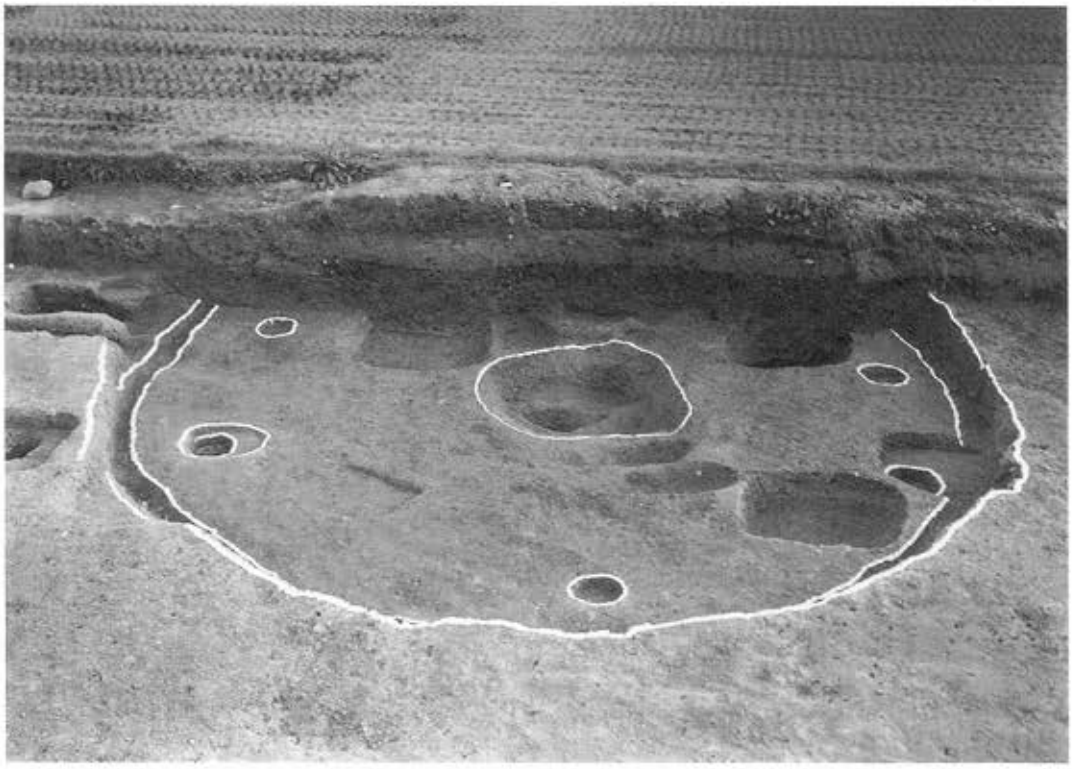
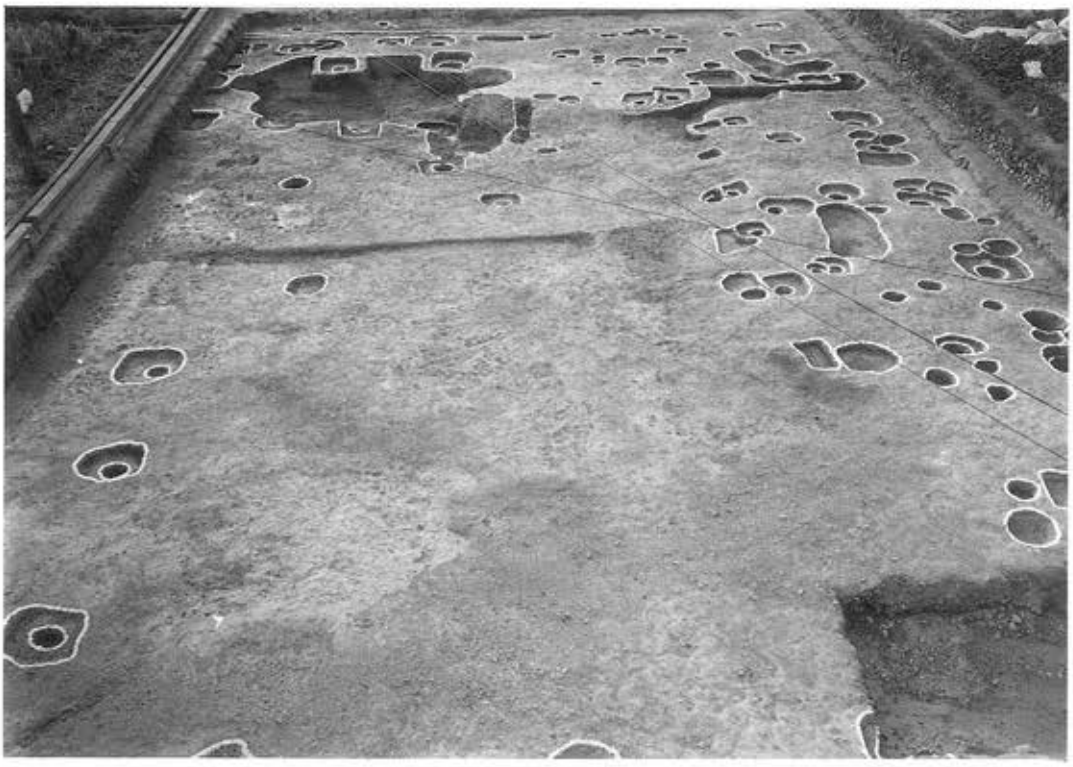

は既往調査区
N
建物－8
建物－10
SB－08
SB－21
建物－3
建物－6
建物－7
建物－1
柵－1
建物－5
建物－9
建物－2
SB－07
建物－4
SB－06
0
20m

図9　主要遺構配置図

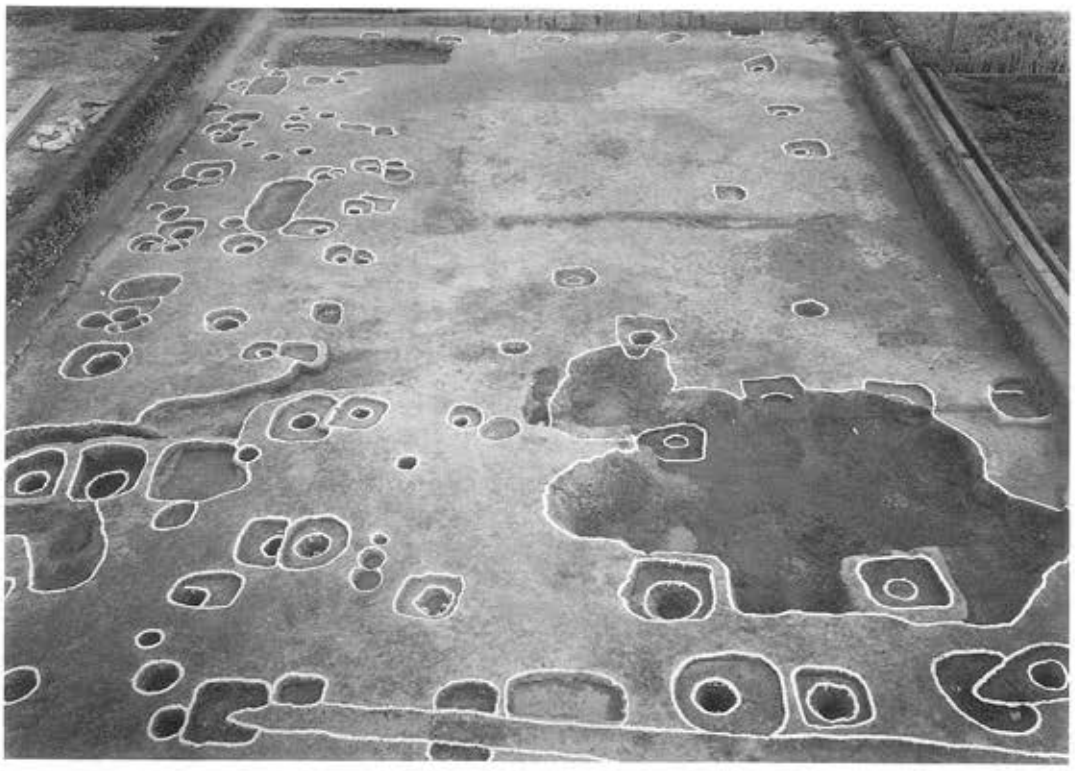


Ⅰ区　SB－06（北から）

Ⅰ区　東半部（北から）

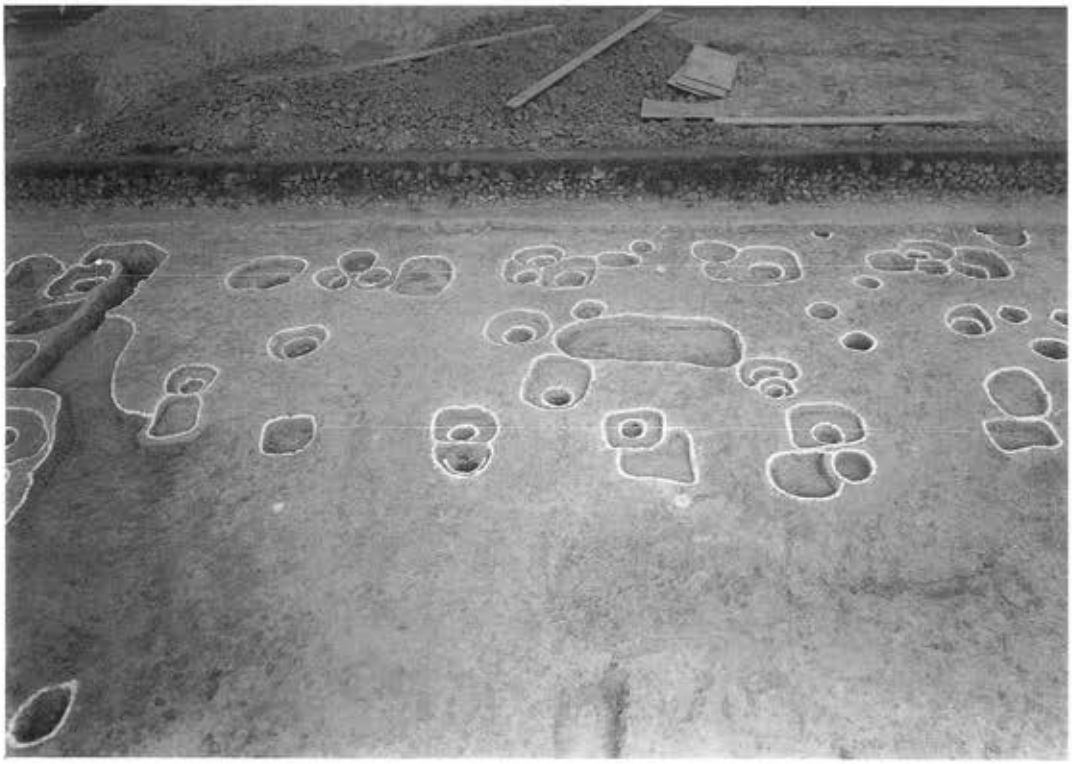


II区　東半部（東から）

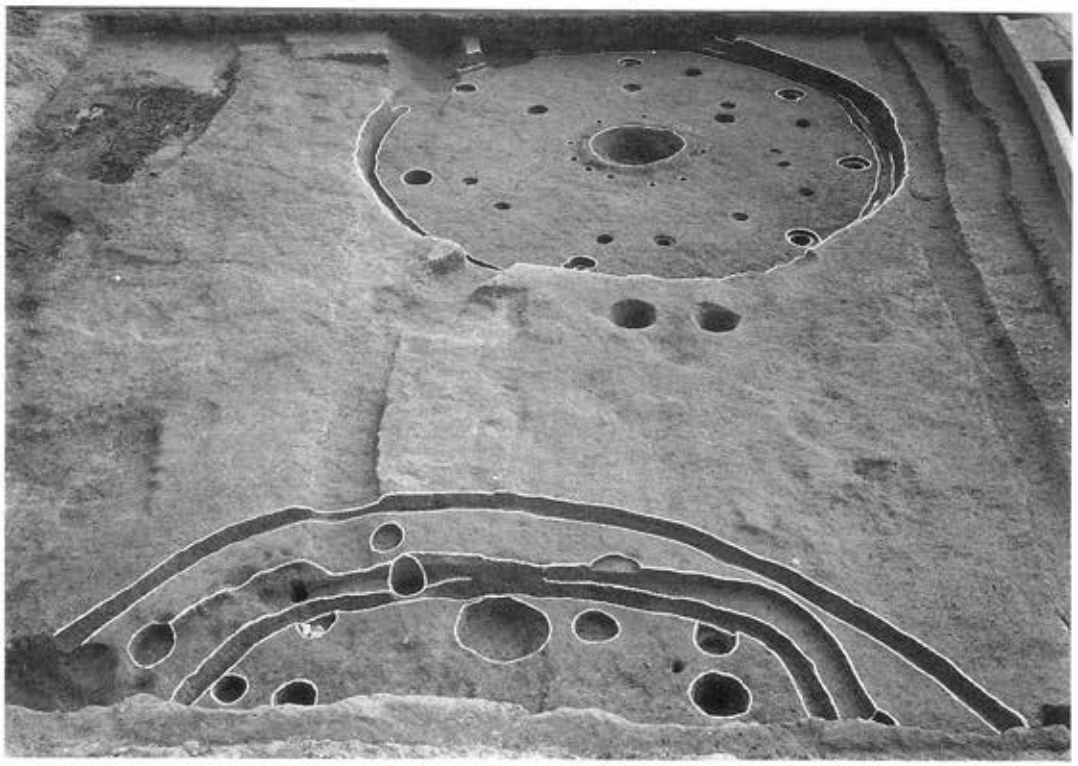


II区　東半部（西から）

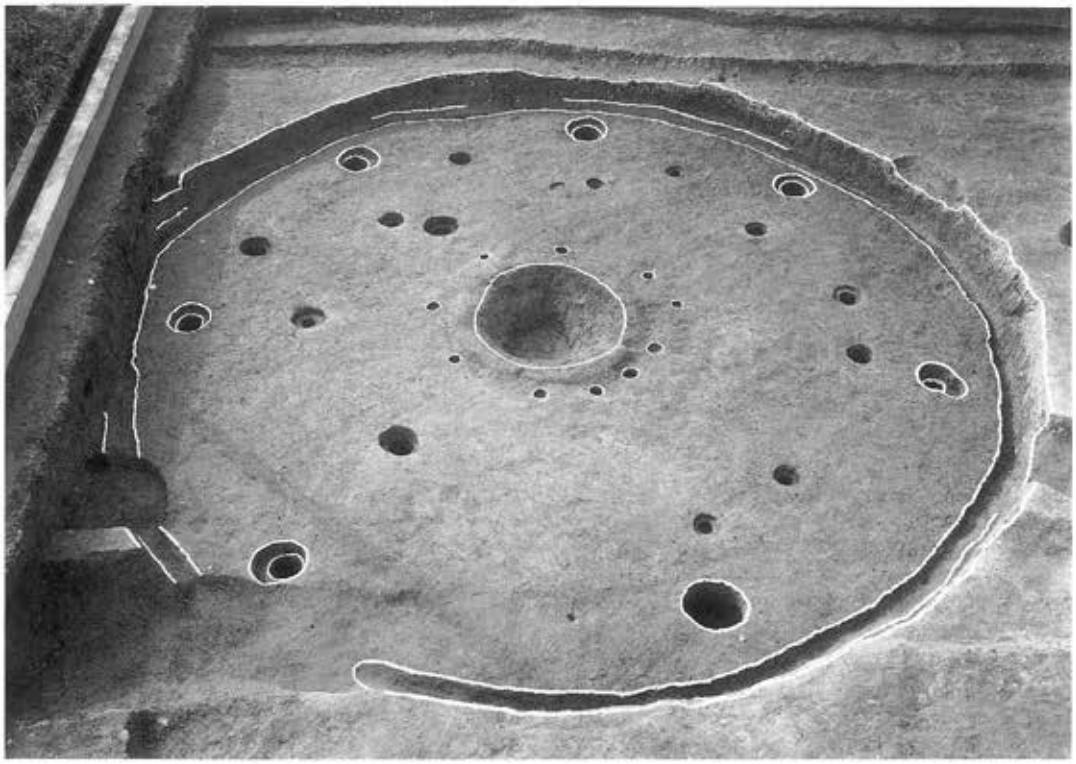
II区　建物－4（北から）



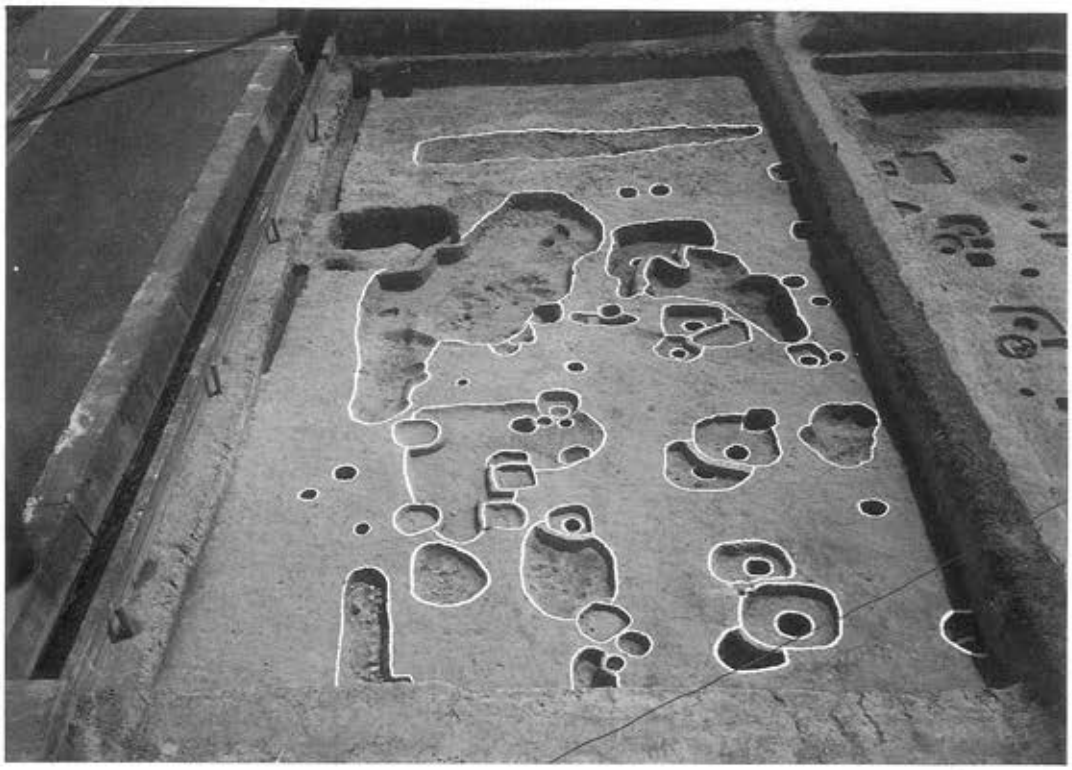
II区　建物－3・柵－1（南から）



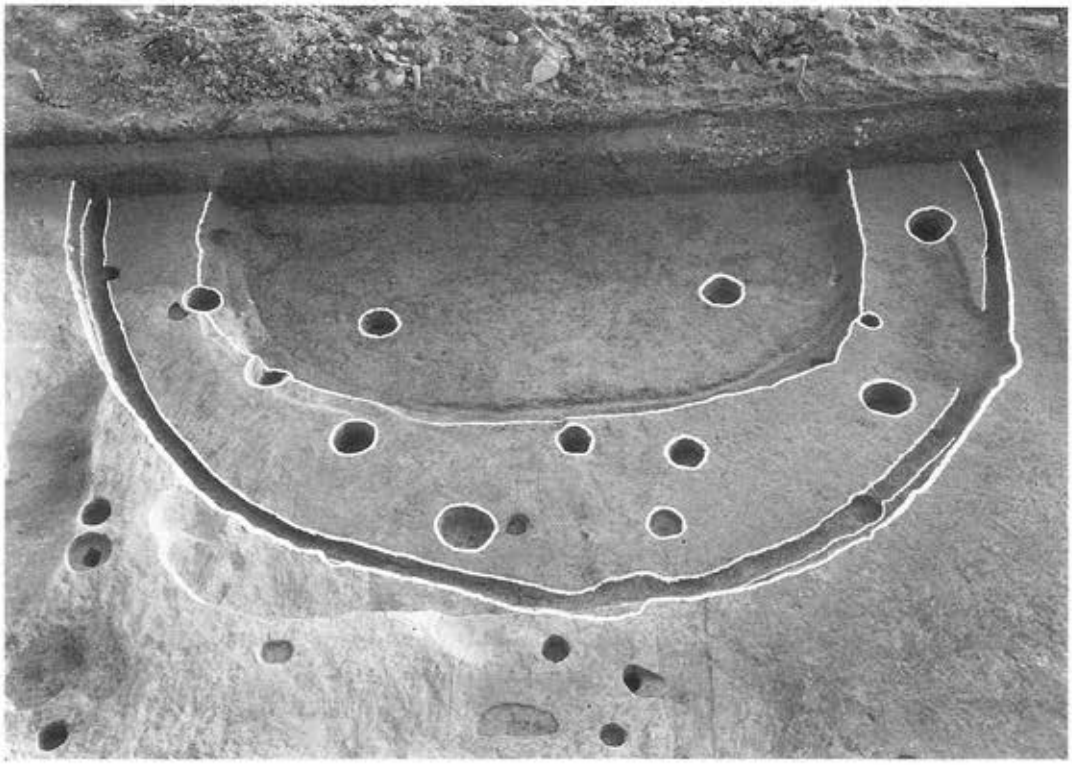
II区　SB－07・08・21（北から）



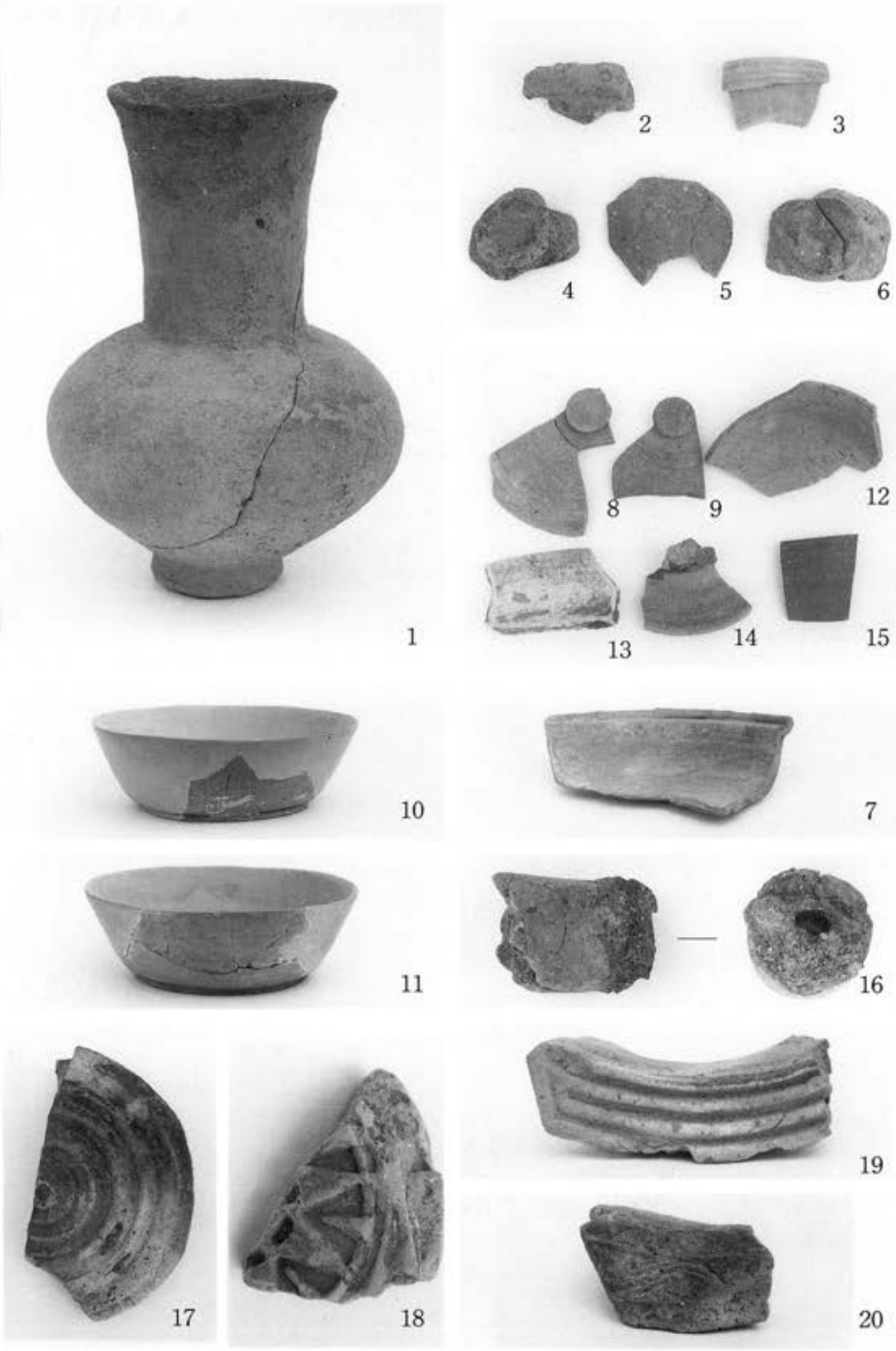
II区　SB－07（東から）



Ⅲ－A区（西から）



Ⅲ－B区 SB－08・21（北から）



出 土 遺 物

佐野遺跡発掘調査概報

平成２年12月

編集
発行　㈶和歌山県文化財センター

印刷　西岡総合印刷株式会社